

## 中戸川吉二考（一） ——「友情」の中の読者

鈴木裕人

中戸川吉二が文壇へでるまでの道のりと、それに深く関わる里見弴との交流のありさまは、中戸川の「里見弴と私」<sup>①</sup>に詳しく書かれている。中戸川曰く、大正五（一九一六）年に、中戸川が小説の発表を頼もうと里見を訪ねた。中戸川の自信作を里見は時期尚早と判断し、目的は達せられなかったのだが、以来親交が結ばれることになる。里見から習作の批評を得たり、文学談義を交わしたりする内に、中戸川も新進作家として世に認められ、「里見弴氏の風格を伝へた、毛彫りの如き心理描写に長じてゐる」<sup>②</sup>と評されるまでに成長した。この頃には中戸川と里見との仲は文壇内外に知られるほど親密であったのだが、とある事件をきっかけとして、結局二人は仲違いをすることとなる。

中戸川の評伝的な文章をみると、里見との絶交の原因は、里見が中戸川に対して「弟子扱ひにした態度」を示したことへの不満に求められるようだ。中戸川の『北村十吉』<sup>④</sup>に書いてあることが根拠となるらしい。中戸川は自伝的な題材を多く用いるため、その小説作品は知られざる彼の動向を窺うための資料として自明に扱われている。このことは、中戸川吉二研究の特徴である。

ただし、『北村十吉』を例として挙げるならば、「弟子扱ひにした態度」の象徴的行為として示される、作の終盤にS氏（里見）が十吉（中戸川）へ要求した、手をついた謝罪という動作が、実は、先輩作家のI氏（泉鏡花）の顔を立てるために

手をついたS氏の所作の反復であることに気付けば、『北村十吉』には小説的な結着が用意されていたのだと認めざるを得ない。作中の記述を信頼するならば、謝罪を求めるS氏からの手紙を目にする前に入稿した、新聞連載三五回分に当たる『北村十吉』の第一章は恋人との出会いや逢引きに終始し、S氏との関係をめぐる物語は示されないのだ。S氏が印象的に描出されるのは三章へ入ってからで、恋愛小説という容を借りて描くS氏との軋轢という作品の方向はここでようやく示されるのである。

『北村十吉』内の出来事を事実とし、十吉の煩悶を中戸川の実感として読むことには躊躇せざるをえないが、中戸川はジャーナリズムを通じて、もう一人の当事者である里見の目に触れることを意識していたと考えられる節がある。ただし今回は、『北村十吉』を用いてジャーナリズムと読者について考えるのではなく、作中に描き出された読者の姿を確認することが目的である。中戸川の創作をモデル小説あるいは事実の記述としてしか捉えてこなかった批評家・研究家の瑕疵を顕在化させると共に、中戸川の小説の方法にその原因を探る。

まずは、中戸川の短篇の中でも自伝的色彩が濃いと評されてきた「友情」<sup>(5)</sup>を読み直してみる。『北村十吉』という表現方法について考察するのはそれからでも遅くはなからうと思う。

\*

同時代における中戸川作品の読まれ方を確認しておこう。先に挙げた「毛彫りの如き心理描写」<sup>(6)</sup>や、「中戸川氏は巧人」<sup>(7)</sup>というように、中戸川は小説技法・文章表現技巧の面で評価を得ていた。しかし、実際に作品を読むと、読者の興味はある一点へと集中してゆくことになる。

大正一二（一九二三）年四月号の雑誌『新潮』に掲載された中戸川吉二の「自嘲」が、翌月号の「創作合評」<sup>(8)</sup>でちよっ

とした議論を引き起こしている。小説作品の読み方に関するもので、菊池寛と中村武羅夫との間で次のやり取りがなされたのである。

菊池。我々の小説は誰のでも、その人のほかの作品をも背景として讀まれるべきものだと思ふ。

中村。私は作者を知ると知らないにと拘らず、作品そのものが獨立して存在しなければ、價值が少くないと思ふ。

『新潮』五月号の「創作合評」は、前月に各誌に發表された小説作品を合評形式で批評したものである。評者は右の二人に、正宗白鳥、久保田万太郎、中戸川吉二、久米正雄、水守亀之助を加えた七人で、「自嘲」の他には、佐藤春夫「佗しすぎる」、武者小路実篤「楠正成」、芥川龍之介「おしの」等二二作が対象とされている。

「自嘲」は『北村十吉』以後の久々の短篇で、書けないことを主題としている。その筋は、創作はもとより小説を読むことすらも止していた作家の私が、何の気なしに小説本を手にしたことから、暫くぶりで小説の筆を執る気になったものの、結局は書けずにいるというもの。作中には私の友人である作家の室田（牧野信一）が登場し、宇野浩二『山戀ひ』や里見淳『直輔の夢』などの、私の読んだ具体的な作家名と作品名があげられていかにも自伝的だ。しかしながら、高等遊民を理想とするという旨の漱石への言及に加えて、二階で読書をする私と一階の妻との関係は『明暗』の津田とお延めいており、作者の心理そのものの反映とみるにはやはり躊躇せざるを得ない作品だ。

この作への言及を先の「創作合評」に探ってみると、「引用者、「反射する心」と比較して）中戸川君が反省しだしたことがい、ぢやないですか」（白鳥）や、「以前よりも中戸川君に油が抜けてゐると思ふ」（久保田）などと、作家の他の作品との比較を行ったり、「樂屋小説だが巧いことはうまい」（水守）や、「中戸川君がかなり癖みを感じてゐるところがあると思ふね。どうも假設敵意識が先だつて、一人で癖みを起してゐるところがいけない」（久米）と、作家本人の実状や交友関

係について知悉したことを前提として感想が述べられたりしている。彼らの指摘は、菊池の「中戸川氏として、さういふ生活（引用者、作に描かれる「退嬰的な生活」のこと）に苛々してゐるといふことは、これから變るんだと思ふ」に読み取ることのできる、作中の私イコール中戸川という認識に則つたものといえよう。

菊池に対抗している中村武羅夫の視点は他の五人とは異なるものとなるはずなのだが、実際には次に引く意見に見られるように、そうはならなかった。

（前略）中戸川氏のやうな年少気鋭であるべき人が、今から、かういふ退嬰的な生活をしてゐるといふことは悪いことだ。あ、いふだらしなさで、然も作品にだけはうまく書いて行くといふことは、作者前途のためによくはない。

作品から中戸川の言葉を聞き取ろうとする中村の姿勢は菊池のそれに等しい。「自嘲」に対する六人の指摘を踏まえれば、先に引用した菊池の提言が、合評者全体の小説作品の読み方を総括していたことがわかる。

ただしこのような評言はひとり菊池にのみ限られたものだったわけではなく、中戸川を批評する者すべてに付いて回つたものであった。三宅周太郎の「中戸川吉二論」<sup>(9)</sup>を引くと、「中戸川吉二は、作者とその作品とが同一な點で珍しい。つまり、中戸川イコオル作品、作品イコオル中戸川だ。そこに微塵、嘘偽りが無い。もつとくどく云ふと、中戸川吉二の藝術を論じる事は、中戸川吉二の爲人<sup>(10)</sup>を論じる事だ」とある。私小説や心境小説批評の通例として作品を作家の鏡として読む傾向が定着した中でも、中戸川の読まれ方にはその傾向が特によく現れていた。

三宅が人物批評で指摘した「中戸川イコオル作品」という見方が、作品への興味を掻き立てる場合もあった。佐藤春夫は「創作月旦」<sup>(11)</sup>で、中戸川の作品（「反射する心」）は解らないとはいふものの、「読みつづけたのは、この作品はどうやら作者その人の生活をそのまま書いたものらしいといふ興味から」だと明かしている。国立国会図書館所蔵本の『反射する心』

の三頁には、文中の「重見さん」から線を引き欄外に「里見氏」と書かれているのだが、この書き込みは、合評や各種文芸批評を介して文芸ジャーナリズムが仕掛けた形の佐藤春夫的興味が、一般の読者の間にも広がっていた例としてみてよいのではなからうか。以上がおおよその、同時代における中戸川や彼の作品への興味および評価である。

\*

中戸川の「友情」は、中戸川研究にいち早く着手した森本修によって「彼のの自叙傳小説の集大成を意圖したものであった」<sup>12</sup>と評される小説集『友情』（新潮社、大正一〇年四月）の表題作である。「友情」を要約するのは難しいが、次のようになる。吉川と友人の山村は、山村の尽力で地方へ逃がしてやった、二人の友人・牛島とお種（二人の関係は姦通にあたる）が再び上京してくると聞くと、お種の夫・時本に捕まりやしないかとあれこれ心配をする。しかし実際に彼らが東京へ来てみると、吉川には次第に山村へ頼りきりの牛島とお種に対する反感が生れてくる。

この作を読む際には、森本の指摘通りのモデル小説としての関心が寄せられる場合が多い。まずは矢部登「中戸川吉二の友情」<sup>13</sup>をみてみよう。

じっさい、中戸川吉二の小説は、いくつか読んで親しんでくると、作中人物があるていど想像できて、興味をそえられる。これは、だれだろう、と思ったりする。『友情』には「中戸川吉二年譜」が添えられているのだから、なおさらで、その前文には、『此の本の性質上、或る種の読者に興味あることと思つたからである』と書かれていた。

二十六歳の中戸川吉二は、自叙伝小説を意識して、年譜を附したのである。読者としてはありがたいことで、私もその『或る種の読者』のひとりであるから。

矢部がいう通り「友情」には、「木田を描いた「わかれ」や山村と出会ったころを髣髴とさせる「晩春」（「新潮」大正十年六月号）、「放蕩鬼」（「改造」大正八年十月号）、「嫉妬」（大正八年一月作）などが思い浮かぶ」部分があり、それ以外にも、「犬に顔なめられる」<sup>14</sup>に書かれたエピソードが挿入されたり、「春」<sup>15</sup>における吉川や、後の「荷風のこと」<sup>16</sup>を思わせたりもし、「友情」ないし『友情』には「自叙伝小説」らしい趣が多分に見られる。

短篇小説「友情」への興味を矢部は、「友情」でいえば、吉川は作者中戸川吉二で、山村は野村治輔だろう。中戸川吉二の小説には、十六歳で識った野村治輔との友情を軸に展開したり、野村との放蕩の断片が織りこまれている」と書く。このようなモデル問題や実生活への興味に則った読み方をしているのは矢部だけではない。矢部は『友情』の巻末に付された「中戸川吉二年譜」を引用しているのだが、『友情』を読んだ高見順もまた日記<sup>17</sup>に同じ年譜を書き写し、モデルへの興味を告白しているし、中戸川と同時代の読者では、佐々木茂索が「鬼よ、かな棒を欲しがれ」<sup>18</sup>で、年譜に「興味を惹かれ」と明かし、「餘りに私が謂ふ所の「或る種の讀者」（引用者、矢部の二重山括弧部）であつた」ことに苦笑したと書いている。矢部によつて山村のモデルとされる野村治輔は、矢部が書く通り中戸川と十代から親交があり、中戸川が作家として立ち、「新潮」が「中戸川吉二氏の印象」<sup>19</sup>を特集した際には、短評「一種の業病がある」を寄せている。里見淳の紹介で春陽堂に勤めたり、雑誌『人間』の編集に関わったりしたが、妻（岸田劉生の姉）を伴い大阪へ落ちて大阪毎日新聞社へ勤めた後、実作での文学的野心を果たすことなく没した。『友情』では、収録作七篇の内三篇に、野村がモデルとされる山村が登場する。以上のように、「友情」に対する読者の関心の中心は、作中人物のモデルである中戸川や、中戸川の諸作品で馴染みとなる彼の友人たちへの覗き見の興味にあつた。それは中戸川の短篇小説を横断した「自叙傳小説の集大成」（森本）として書かれた「友情」であるからこそ増幅された興味であつた。

ただし「友情」には、中戸川の商品としては遺されていない作中作がある。矢部・高見・佐々木には、作中作への言及はないが、小説「友情」はこの作中作を中心に構成されており、また、モデルや実生活への関心を焚きつけるかたちで作

品への興味を促してもいるのである。

「友情」における作中作とは、牛島とお種が上京してくる少し前に吉川が初めて書いた戯曲である。戯曲を読んでモデル探しをする役が与えられたのが、他でもない作中人物の山村だ。山村は、「あの中にかいた主人公が僕をモデルにしたのだとすれば、モデルとしての不服はある」というのだが、吉川の戯曲とは次のようなものであった。

筋は、事實と空想とがないまぜになつたもので、主人公の山村らしい人物が、副主人公のこれも牛島らしい人物の戀愛事件に好意を持つて、お種を頭において描いた副主人公の戀人である人妻を、自分の下宿においてやり、二人を駈落させてやるためにいろ／＼骨を折つたりするのだが、その間に時本らしい人物が子供をつれて主人公の下宿へ訪ねて來たりして、いろ／＼主人公が苦悶する場面がある。結局は二人を無事に駈落ちさせてやることになるのだけれど、大體、主人公は前からその人妻に惚れてゐる。人妻の方では餘計に主人公を戀しく思つてゐるのだが、お互ひにお互を卑下してゐて、一度も本心をうち明けあふことはなかつた。

戯曲の筋となる出来事は、作中現実の駈落ち騒動と違ひはない。ただ、吉川は出来事に自身の疑問と願望をさしはさむ。それが「戀愛事件にはあまりに人間放れした親切をつくした山村の、心理状態に對する疑ひ」や、「美しいお種が、人妻でさへあるお種が、牛島にそれほど熱烈な戀をしてゐるやうには、思ひたくない氣持があつた。山村なら價するけれども」という思ひであり、主人公と人妻の恋として創作に描かれたのである。

戯曲を読んだ山村は、この創作を「藝術品としては文句なしに僕は感心した」のだが、事実と比較して先の通りモデルの側からの不満を述べた。

「そりやかうだ。もし僕があゝの事件があつた時にスマイル（引用者、お種のあだ名）にラヴしてゐたとしたら、たぶん君が書いた通りの行動をしたに違ひないと云ふことだ……………」

「そして事實はどうなんだ」

「事實はまるつきり僕にそんな氣持はなかつたのさ。それを疑ふなんて君もよつぽどどうかしてゐるね」と、山村は笑ひ出して、「僕は實際牛島君たちの事件では純粹な氣持で働いてやつたんだよ。だから、君の戯曲の價値は君の空想の價値だよ。が、如何にも僕が經驗しさうな氣持を細かに君がかいてくれたと云ふことは、それだけ僕をよく理解してゐてくれると思つて感謝するよ……………」

この時点で、「友情」を読み進める読者の前に、上京した牛島とお種が時本に捕まるか否か、また、お種が上京すること  
で山村とお種との間に隠されていた恋愛感情が露わとなるかどうかという二つの展開が示されたようにみえるが、この小説の展開はそう単純ではない。

牛島とお種が赤子を連れて上京すると、二人はいつかのように山村の下宿に居候することとなる。さしあたり問題は金である。牛島夫婦は熊本から品川までの車中で、一度も弁当を食べられないような經濟状態だ。書生つぽの吉川と山村が養わなければならない。そのうえ、夫婦が外出するのは危険なので、相談や交渉には吉川と山村が出る。そんなことをしている間に山村の下宿の雰囲氣も変わつてきた。「今までは淋しすぎるほどキチンと片づいてゐた六疊間が、ゴタ／＼してきた。（中略）お種があるやうになつたことは、座敷の中をなまめかしくしずにはおかなかつた」。そんな部屋へ吉川は毎日出かけてゆき、牛島の身の振り方を皆で相談するのだが、「朝から晩までそんな固つ苦しい話ばかりしてゐると云ふ譯に行かなかつた。一日の大部分は、呑氣な話をしてつぶしてゐた。繪や文學に就いて談じ合ふこともなかつたけれど、それと同じ熱心さで、戀愛の話も出る」。牛島が話すのは当然「天草島にゐた頃のお種との關係」であり、しかも話題は時



に「色情がかつた話」へも進んでゆく。お種の上京で秘密が明らかとなるかに思われた、吉川が戯曲で思い描いた山村とお種との清純な恋愛は、現実からはどんどんと遠くなってゆくのである。

時間が前後するが、戯曲を書いた吉川は、すぐに山村を訪ねる。「山村は彼にとつて、たつた一人の読者でもあり批評家でもあつた」からだ。ただし山村の心理に疑念を抱いていた吉川は、この作をもつて、作の批評以上に聞いてみたいことがあつた。それが山村の恋愛感情であつたのは先に見た通りである。しかし案に相違して、お種に恋をしていないという言葉は、山村の本心であるらしかつた。読者はここで、作中作が作中現実によつて否定されたことを知るのである。作中から虚構性を排除することによつて、「友情」が自伝としてのリアリティを演出したことは、この作品の読まれ方を考える上で意識しておく必要があるだろう。

吉川が山村に戯曲を読ませる際に興味深いのは、吉川が作品を通じて山村に対し間接的に質問を投げかけようとしていることである。山村の方も、創作にモデルを発見するまでは「友情」のモデルを推測する矢部登とそう違はないのだが、言外の意図を敏感に感じ取り「事實」を語り出していた。ここに見られる作中作の効果について考える際に、外山滋比古『近代読者論』<sup>20</sup>中の「『のぞき』」が参考となる。

もともと、文学作品にとつて、S→H（引用者、会話における話し手をS、聞き手をHとする）のHに相当する当事者としての読者がありうるかどうか、（中略）かりに作者がある読者を念頭において作品を書いた場合、その作者意中の読者は当事者的な読者である。しかし、普通の読者はそういう読者ではない。作者と読者の関係は読者の数だけ違った形で存在する。

外山は「当事者的な読者」ではなく「普通の読者」に関心を持ち、作者からは断絶した「普通の読者」が「近代読者」

として目覚める様を追ってゆく。その際、右の通りに一対一の会話（S↓H）における「当事者」（H）に相当する読者の存在をいぶかしむという捉え方は、「ジャーナリズムは、筆者と読み手をもっとも離れている分野だと言い得る（中略）作者と読み手の別は、ジャーナリズムにもあったとしてもよい」という考えに基づいている。「友情」に当てはめてみれば、ジャーナリズムを介さない吉川と山村との間には対面的な「S↓H」の関係が保持されているために、「当事者的な読者」である村山には、創作には記述されない隠された意図へ気付くことが出来るのだということになる。

ただし吉川の戯曲は他の二人のモデルによっても読まれる。外山のいう「当事者的な読者」が山村と同等の読解能力を備えていたのか否かを判別するために、読者としての牛島とお種の姿も確認しておこう。内輪だけに閉ざされているかに思われた作品世界は、別の様相を帯びてくるはずだ。

先の通り、吉川の戯曲はまず初めに親友である山村によって読まれた。山村は唯一の読者でありまた批評家でもあった。戯曲がもしも雑誌に発表されたものであるのならば、創作を読む読者を把握する事は現実的には困難であるが、吉川の場合には違った。吉川は自ら作品を持ってゆき、読者へと手渡すのである。

「ともかく直ぐよんでみてくれよ」

吉川はせか／＼して云つた。

「あ、読んでみやう」かう云つて、山村は又暫く原稿の重みを享樂してゐたり、パラ／＼めくつて紙の光や生々したインクのとを眺めたりしてゐたが、やがて、うしろ向きになつて、机に靠れかゝつて熱心によみ始めた。

吉川はハラ／＼して山村のうしろ姿を視守つてゐた。山村が無事によみ終つてくれるまで、階下から茶を持つてきたり、訪問者があつたりしてくるなど念じてゐた。それは長い長い時間であつた。彼も山村がよみ終つてくれるまで邪魔にならないやうに、そこらにあつた雑誌でもみてゐやうと思つたが、なんにも手につかなかつた。

何千部も刷られて全国へ散らばる雑誌や新聞の読者を相手にしてはまずできない作者の経験が描かれている。作品への批評及び、それとはまた別の心情とを述べた山村は、作者吉川にとつてもつとも理想的な読者であった。

次に描かれる二人は、山村のような好い読者ではない。創作を読むのは、牛島とお種であるのだが、彼らの感想や反応によって、創作が作者の望む通りに読まれるとは限らないことが明らかとなつてゆく。吉川が様々な読者の許へ作品を届ける出版流通システムの役を演じることで、閉鎖的に思われた「友情」の作品世界は、今度はさながらジャーナリズムの空間とでもいふべき開放的な場へと変貌するのである。作中での順番通り、牛島からみてみよう。牛島に反感を抱き始めた吉川が「さうだ。あの戯曲を牛島によましてやらう」と思いつく。

それから二三日たつて、山村に一寸相談してみても、牛島へ戯曲をよませてみた。目の前で讀まれては流石にやり切れなかつたから、吉川は、朝からふところへ入れて行つた原稿を、夕方家へ戻る時分になつて、よんでみると云つて牛島へ渡したのだつた。

翠朝山村の下宿へ行つてみると、牛島は別段氣を悪くしてゐる様子をしてゐなかつた。何時ものやうにニヤ／＼した微笑を顔にた、へて、機嫌よく吉川を迎へた。

「ゆふべよんでみたよ。なか／＼うまいね。君がこんなうまいものを書くやうにならうとは思はなかつたよ……………」

かう云つて、牛島は原稿を吉川へ返したが、山村の方を向いて又云つた。

「吉川君は素的な技巧家だね」

「あ、技巧家だよ。そして、素晴らしい詩人で、空想家だ」と、山村が云つた。

(中略)

そんな會話をきいてゐるうちに、吉川は堪へ難い氣がした。肝心な問題をはぐらかされて了つて、直接な目的でない批評を受けてゐることで、自分の作品が二人から侮辱されてゐると云ふ氣がした。

牛島は何から何まで山村とは対照的に描かれる。中でも目を引くのは、牛島の感想に対する「肝心な問題をはぐらかされて了つて」という吉川の思いである。吉川はそもそも、戯曲を読ませることで牛島と「S↓H」(外山)の關係を結び、牛島から何らかの反省を引き出そうとしたのであり、山村がお種への恋愛感情の有無を語つたような告白を期待していた。にもかかわらず、通り一遍の批評がなされたために「はぐらかされた」と思つたのだが、牛島が隠されたメッセージを受け取つたかどうかはわからないのだ。吉川の眼には過剰なまでに映つた山村の親切を当たり前に受け容れるのであれば、牛島にとって、作に描かれた恋愛感情は、お種との間に子供まで儲けた自分に関係するものと取るには荒唐無稽で、モデルに思い当たるはずがない。とうぜん牛島が山村へ掛ける負担に反省することもない。作者と「S↓H」の關係を結ぶことには失敗し、単によくできた創作として戯曲を読む牛島は、創作の出来不出来を解する能力のみをそなえた「普通の読者」(外山)ということになる。また、山村と牛島の會話からは、作者から離れた読者同士が作品を話題とする様子も窺われる。お種は右の引用部の後、「そんな面白いものなの。私もよまして頂きませうかしら」と言つて、原稿を受け取るのだが、彼女の鑑賞眼は非常に怪しいものとされている。お種は画家を志す牛島にかわつて文部省美術展覽會を觀にいつた感想に、「見るべき繪なし」と書いて牛島へ送つたというのだが、山村でさえも媚をみてとつて顔をしかめる。吉川は感想を聞く前から「お種が、牛島と二人きりでゐる時に同じやうに牛島へ媚びた調子で、自分の作品の批評されることを思つて、不愉快な氣持」になる始末である。お種はその場で「熱心に吉川の原稿に讀み耽つてゐるが、時々目をあげて、牛島や山村や吉川たちの話にも注意を引かれ」るが、どうやら読み終へる。

お種は、しかし、よみ終つてもその時は何も云はなかつた。黙つて原稿を吉川に返して、淋しい笑を浮べてゐた。吉川はもの足らないやうな氣がしてゐた。

淋しい笑にお種の秘められた恋心を読み込もうとしても、審美眼を持たないお種には、作品の意図が汲み取れていかず怪しい。自身がモデルであることに氣付くワケがなく、牛島よりも一段下等な、文学を解さない読者というのがお種の役どころである。

以上の山村・牛島・お種が、作中に描かれた吉川の戯曲の読者となる三人である。彼らの許へと創作を運ぶ吉川の動きは出版流通機構を暗示し、作中の空間は友人の集まりからジャーナリズムの場へと変貌する。そこでは創作のモデルがみな「当事者的な読者」(外山)として振舞うわけではなく、三人の読み方は階層的に区別されているのである。

ただし吉川の戯曲には、もう一人「時本らしい人物」が存在した。ジャーナリズムの下では、人々は、情報を得る者と得ない者とに分けられる。山村らが前者であつたのに対して、時本は後者なのである。

「友情」の起こりは、吉川の許へ時本が訪ねて来ることである。事件から二年が経ち、二人の記憶が薄れてきたところに時本が吉川と山村を相次いで訪ね、これによつて興味を再燃させた二人が牛島お種の噂を始め、手紙を送り、それが元で牛島らは上京してくる。いわば吉川が戯曲をかけたきつかけは時本であり、吉川の意図の外側で真に戯曲を求めていたのも時本であつた。

時本が吉川を訪ねた理由は、お種の居所を問い詰めるためであつた。時本は独自の調査でようやくお種が牛島と手を取つて逃げたらしいと結論したのだが、確信があるわけではない。そこで吉川と、主に山村とから聞き出そうとやってきたのだ。やってきた時本はもう中年ながらお種の男関係に過剰反応し、吉川にまでこんな調子だ。

「君にもなんだつてね、お種は手紙をやつたことがあるんだつてね……………」

「あ、北海道で一度貰つた。併し、別に妙なことなんか書いてありやしない」

「そりや當り前だ。妙なことなんて書いてやつたんなら承知しやしない」と、殺氣立つて時本は云つたが、流石に、あまり大人氣なかつたと感じたらしく（以下略）

お種出奔の真相と相手の男とを探り出そうと血眼になっていた時本である。彼が知りたかつたことは、すべて吉川の戯曲が創作し記していた。「お種に逃げられてからの時本が、氣狂じみた男になつて、短刀をふところへ入れて東京中をうろつき廻つてゐる」ということだから、時本が戯曲をみたならば矛先は山村へ向けられかねない。「友情」に數かれたジャーナリズムの構図によつて、吉川の戯曲は、公にすれば人命にかかわる筆禍となり得る可能性を秘めた仕掛として機能し始めるのである。

「友情」における時本の脅威は、先に予想したような、上京した牛島・お種との修羅場を演じるという通俗的な役にはない。作者が、「事實」（山村）を知らないジャーナリズムごしの読者から受ける誤解の表象として、時本は描かれているのである。小説「友情」は、モデルの有無や出来事の事実性ではなく、作中作を読まない時本を描くことによつて生じる、創作と読者とをめぐるスリリングな関係によつて引締められている。

\*

「友情」は、作中人物における作中作の読解に差を生じさせ、その差に意味を見出している。対価を払えば情報が得られるジャーナリズムの公平性に逆行し、「一般の読者」（外山）には決してなり替わることのできない「当事者的な読者」（外山）

を意図的に作り出すことで、「友情」はジャーナリズムによって得られる情報の限界を示すと同時に、当事者を知るためのモデル情報への関心をひどく煽る。表面的にしか作品を読むことのできない牛島ら「一般の読者」に対して、作品を深くかつ作者の意に沿うように読むことの出来る山村ら「当事者的な読者」の優越性が、読者に当事者へと接近する努力を払わせる。そのうえ「友情」は、作中作を作中現実によって否定することで自伝風のリアリティを獲得した作品なのであった。今日までささやかながら保たれてきた「友情」への関心の根源は、作中作とその読み手をめぐる物語として作品に構造化されていたのである。今後の中戸川吉二研究では、当事者への接近を試みる姿勢ではなく、観察し分析する視点が求められよう。

「友情」では、作家を志す山村は吉川の戯曲に感心するばかりで、実作を行わないのだが、後年の『北村十吉』では、相手も小説家であった。同じ恋愛事件に取材した『おせつかい』<sup>②</sup>を里見弴が発表し始めたことで、『北村十吉』は、現実に「当事者的な読者」を得ることとなる。中戸川と里見をジャーナリズム越しに眺める人々の前に示された『北村十吉』と『おせつかい』について、稿を改めて考えてみたい。

## 註

- (1) 『人間』大正一〇年二月号。
- (2) 芥川龍之介「大正八年度の文芸界」(大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編纂『毎日年鑑(大正九年、一九二〇年版)』、大正八(一九一九)年一二月)。引用は『芥川龍之介全集』(第五卷、岩波書店、平成七(一九九六)年三月)によった。
- (3) 山下武「中戸川吉二の『北村十吉』」(『幻の作家たち』冬樹社、平成三(一九九二)年五月)には、里見が許したという二人の「対等」な関係が、やがて二人のあいだを抜き差ししないところまでコジレさせてしまったのだ。だから、文学少女

の富枝というものがそこへ現われようと現われまいと、早晚、この二人の關係が破局にいたることは、理の当然だったといえよう」とある。また、盛厚三「里見淳と中戸川吉二」(『北海文学』平成八年六月号)でも、「里見淳と中戸川吉二の義絶、それは当時の關係を考えると起こるべきして起った事件ともいえる。それは「S氏(里見)を出しぬいたり裏切ったりするやうな行為をしたことがある。だがそれは自分だけの理由があった。一口に云へば、(弟子のやうに従順ではありたくなかつたから)」という吉二の感情があつた」とする。

(4) 『國民新聞』大正二一(一九二二)年四月一五日から一〇月三二日まで、一八三回。後、叢文閣(大正二一年二月)より単行本刊行。

(5) 『新潮』大正一〇年一月号。

(6) 芥川龍之介「大正八年度の文芸界」前掲。

(7) 平林初之輔「新作家七人論」(『新潮』大正九年四月号)。引用は『平林初之輔文藝評論全集』(下巻、文泉堂書店、昭和五〇(一九七五)年五月)によつた。

(8) 『新潮』大正一二年五月号。

(9) 『新潮』大正九年一〇月号。

(10) 『新潮』大正八年九月号。引用は『定本佐藤春夫全集』(第一九卷、臨川書店、平成二〇(一九九八)年七月)によつた。

(11) 『反射する心』(新潮社、大正九(一九二〇)年一月)がデジタルコレクションで公開されている(書誌ID: 000000577955)。該当箇所のコマ番号は六。

(12) 森本修「中戸川吉二論」(中、『立命館文學』、昭和三七(一九六二)年二月)。

(13) 『文獻探案』二〇〇五年号。

(14) 『新思潮』大正八年一月号。入水自殺の失敗を、失敗のきつかけとなつた野良犬を交えながらかいた小説。「友情」には、「附近の海岸で自殺しかけたことも二度ばかりあつた」とある。

(15) 『人間』大正一〇年一月号。友人の孝一と岸本とを引き合わせる重吉の心境をえがいた小説。「友情」には、「彼は山村にあ



ふと、きまつて何時も、最近新らしく出来た友だちである木田や牛島のことを吹聴した（中略）あとで、みんなを紹介してから、吉川の誇張はいち／＼はげて、みんなから一様に唾棄された」とある。

(16) 『文芸春秋』大正二十二年一月号。好む作家として永井荷風について書いた随筆。「友情」には、「永井荷風が一番好きで、尊敬してゐた」とある。

(17) 『高見順日記』（第三卷、勁草書房、昭和三九（一九六四）年十一月）。昭和二〇（一九四五）年四月九日から二〇日までの日記に、中戸川の主要作品を読んだ感想が記されている。

(18) 『新潮』大正一〇年六月号。

(19) 『新潮』大正九年五月号。

(20) 『近代読者論』みず書房、昭和四四（一九六九）年一月。

(21) 『読者の誕生』（『近代読者論』前掲）。

(22) 『人間』（大正一一（一九二一）年一月号から三月号まで）に連載した後、『人間』廃刊のため、『新潮』（同年四月号から八月号まで）へ引き継がれる。翌年七月に新潮社より単行本刊行。

\* 「友情」の引用は初出に依った。引用に際してやむを得ず新字を用いた箇所がある。

（文化創造研究科博士前期課程修了生）